牧畜民ガブラ・ミゴの歴史的記憶

曽我　亨

1　オロモとソマリの境界

エチオピア南部に住むガブラ・ミゴ†は，ラクダを飼育し，野生サイザルで編んだマットで覆われた家に住み，イスラム教を信仰するなど，ソマリ民族 に似た生活を送っている。その一方で，彼らはオロモ語を話し，オロモ民族に特有の年齢階梯体系を採用するなど，オロモにも似ている。ガブラは，ソマリと オロモの境界に位置する少数民族なのである。

さて，エチオピアは1995年に民族に基盤をおいた連邦制を採用したが，これによって，それまでアムハラに支配されてきたオロモ，ティグレ，アファール，ソマリなどの「大民族」は，自治州を手に入れ，広範な自治を獲得した。その一方で，これら大民族の境界領域においては，資源をめぐる紛争が起きるようになってきた。大民族は資源の獲得をめざして，境界領域に暮らす少数民族を取り込もうと試みている。ガブラは，オロモ系民族のボラナとグジ，ソマリ系民族のガリに挟まれて暮らしているが，ソマリとオロモの両民族から民族アイデンティティを明らかにするよう求められてきた。

ガブラは連邦制を，いずれかの大民族を名乗らない限り政治的利益（行政職や議席）を確保できないシステムであると理解した。現在，ガブラはオロミア州を中心に住んでいる。理論的には，たとえばオロモ以外の人々がオロミア州の行政職についたり，オロミア州の代表として議席を獲得することも可能である。けれどもガブラは，オロミア州に住む限りはオロモを名乗らなければ政治的利益を確保できないし，紛争の解決や裁判などで著しい不利益を被ると考えたのである。とくに2001年，オロミア州のボラナ郡（ワラダ）が県（ゾーン）に格上げされることが決まると，その行政職を獲得することがガブラにとって重要な問題となってきた。そしてこの問題に呼応して，ガブラは，自分たちがオロモとなるべきかソマリとなるべきかを考えるようになってきたのである。

ガブラは「オロモであるか，ソマリであるか」を

† エチオピアとケニアの国境地帯には，ガブラを自称する民族が二つ住んでいる。研究者たちはエチオピア南部を中心に住むガブラを「ガブラ・ミゴ」，ケニア北部を中心に住むガブラを「ガブラ・マルベ」と呼んで区別してきた。本稿では，エチオピア南部に住む「ガブラ・ミゴ」を対象としているが，以下では単にガブラとする。

議論する際，自らの文化・宗教・言語に加え，歴史的記憶を参照した。本稿では，とくに歴史的記憶をとりあげ，それが文化・宗教・言語などの「本質的」特徴とは異なる性質を備えていることを指摘するとともに，それが民族アイデンティティを選択し，新しい民族意識を生成する上で重要な役割を果たしていると主張する。

2　民族の合理的選択と本質的説明

ガブラは，以下のような理由から，オロモ派とソマリ派にわかれた。

まずオロモ派は次のように考えた。ソマリを名乗ると，近隣のオロモ系民族の攻撃が予想され，エチオピアのソマリ州へ移住することを余儀なくされる。しかしソマリ州は農耕もできない空腹の土地だ。自分たちはオロミア州を離れたくない。またオロモを名乗らないと，民族間で土地・家畜をめぐる紛争が生じたとき，オロモの行政官がガブラに不利な決定を下す危険性がある。だからオロモを名乗る方が得策である。

一方，ソマリ派は次のように考えた。ガブラはオロミア州で十分な仕事を得ていない。オロミア州の教育水準は高く，十分な教育を受けていないガブラがこれ以上の行政職を得るのは困難だ。新設されるボラナ県の行政職を得るのも難しそうである。ソマリ州ならば比較的教育水準も低く，ガブラも多くの行政職を獲得できる可能性がある。だからソマリを名乗る方が得策である。

いずれも民族アイデンティティの選択を，より多くの利益を獲得するための手段としており，彼らが選択する際に重視するのは合理性であるといえる。だが，この問題を話し合う会議の場では，合理主義的説明はされなかった。ガブラがオロモであること，あるいはソマリであることの根拠は，文化・言語・宗教などに求められたのである。ガブラにとって，民族アイデンティティは合理的に選択するものであったとしても，その選択の根拠は本質主義的に説明されなければならなかったのである。

ただし，オロモとソマリの両方の特徴をもつガブラの場合，こうした本質主義的説明はいずれも決定打とはならなかった。そこで，ガブラの議論は歴史的記憶の想起に向かっていった。今の自分たちにはガブラが何民族なのかわからない。けれども過去を調べれば，ガブラがいずれの民族であったかがわかるはずである。ガブラはこのように考えたのである。

3　歴史的記憶を支える仕組み

歴史的記憶について述べる前に，ガブラの歴史的記憶を支える時間的表象について説明しておこう。ガブラの歴史的記憶は，精密な太陽暦と７年周期暦によって支えられている。太陽暦は，１年を365日から構成する。365日とは，52週と１日のことであるから，仮に１年が月曜日から始まると，大晦日は必ず月曜で終わり，次の年は火曜日から始まる。さらに翌年の元旦は水曜日，翌々年は木曜日となる。ガブラは各年を，元旦の曜日にちなんで，月曜年，火曜年，と呼んでいる。こうして７年周期の暦がつくられるのである。

この７年周期暦に出来事を組み合わせると，７年周期に前後関係が生まれる。木曜年を例に挙げると，ガブラは，バッタが来襲した木曜年（1929年），イタリアがやって来た木曜年(36年)，白人がラクダを取り返した木曜年(43年)などと呼び，前後関係を明確に認識している。ガブラは，７年周期暦と出来事を組み合わせることで，現存する成員の記憶が及ぶ限りの過去をラセン状の時間として構造化しているのである。

4　ガブラの歴史的記憶

ラセン状の時間にあらわれる出来事は，その時代を経験した人々が共有する重要な出来事ばかりであり，それ自体がガブラの歴史的記憶である。ラセン状の時間にあらわれる歴史的記憶をもとに，ガブラが近隣民族とどのような関係を結んできたのか見ていこう。

1. 帝政前期（1935年以前）

1920年，北から来たティグレ人がガブラの婦女子を誘拐し，身代金として家畜を奪った。ガブラはケニアへ逃げたが，今度はマラリアで多くの者が死亡した（23年）。エチオピア政府が盗賊を平定すると（24年），ケニアから戻ってきたが，その後，政府が課す重税に苦しんだ。

1932年，ボラナ・オロモとガリ・ソマリが小規模な紛争を起こした。しかし，この時代は銃もなく平安であったとガブラは回想する。

2. イタリア占領期（1936〜41年）

この時期，ガブラはイタリア軍の傭兵となったソマリ系牧畜民の略奪をうけた。1941年，イタリア軍が撤退すると，大量の銃がソマリ系牧畜民の手に渡り，さらに多くの家畜が略奪された。

3. 帝政後期（1942〜73年）

1964年と65年，ガリ・ソマリが大規模な攻撃を仕掛けてきた。ガリは，エチオピアのオガデン地域の奪取をねらうソマリア政府の支援を受けていた。一方，エチオピア政府の支援を受けて，ボラナ・オロモがガリに反撃した。ガブラは，ガリから攻撃を受ける一方，ボラナからも攻撃を受けた。銃をもたないガブラは，グジ・オロモが住む地域へと逃げていった。紛争が終結すると，ガブラはグジ・オロモとともに平和に暮らした。

4. 軍事社会主義政権期（1974〜91年）

1975年，軍事政権誕生の混乱期に，ボラナ・オロモとグジ・オロモは，ガブラを徹底的に攻撃した。彼らは国境の町モヤレに逃がれた。その間，120人が殺害される苦しい道のりだった。彼らは会議を開き，生き延びる方策を考えた。ソマリアと交易を行っている商人から，ソマリア政府が銃を提供しているという情報を得ると，彼らは若者を派遣した。当時，ソマリアはオガデン地域の奪取を再度企てていた。

1976年，ソマリアで軍事訓練を受けた若者たちは，「ソマリの兄弟」を名乗るとゲリラ活動に乗り出した。

1979年，エチオピア政府の反攻がはじまると，ガブラはケニアやソマリアに逃げていった。ケニアに逃げた者は，ゲリラの侵入を恐れるケニア政府の取り締まりを逃れ，再びエチオピアに戻ってきた（80年）。ソマリアに逃げた者は，UNHCR の難民キャンプで暮らした。しかし，ソマリアの治安が悪化すると，エチオピアへの帰還を決意する（87年）。ガブラは「自分たちはオロモである」と名乗り出て，UNHCR の監視のもと，エチオピア南部に帰還した。

5. EPRDF 政権期（1991年以降）

1991年，軍事政権が崩壊すると，エチオピア南部は戦乱に包まれた。このときガブラはグジ・オロモとともに，ボラナ・オロモに対する略奪を繰り広げた。92年，紛争が沈静化すると，ガブラはオロモ系牧畜民と良好な関係を築く。一方，ソマリ系牧畜民との関係は悪化していった。

5　歴史的記憶の想起

以上の歴史的記憶は，その時代を経験した者なら誰もが共有する集合的な記憶である。ただし，その細部を肉付け，詳細に語る能力は個人の資質に大きく依存している。2001年，ガブラは，民族アイデンティティを決めるために会議を開いたが，会議では資質に秀でる者たちが中心となって，議論をリードしていった。

オロモ派の人々が喚起したのは，1961年に起きたエチオピア政府によるラゥイン・ソマリの追放である。帝政前期にソマリアからエチオピアに移住してきたラゥインは，当時，ガブラとともに牧畜を営んでいた。両者は異なる言語を話していたが，容姿•服装•家の形•生業•ムスリムである等の点で，ほとんど見分けがつかなかったという。ところがソマリアと敵対したエチオピア政府は，ラゥインをソマリアへと追い出した。実際の指揮は，ボラナ•オロモの行政官たちがとったが，彼らはラゥインのみ追い出し，同じ格好をしているガブラを追い出しはしなかった。これはつまり，ガブラがオロモであったからだとオロモ派の人々は主張した。

一方，ソマリ派の人々は，1964〜65年，74年，92年の殺戮の経験を喚起した。そしてボラナが何度もガブラを襲ったのは，ガブラがソマリであったからだと主張したのである。

結局，この会議で，ガブラは民族アイデンティティを選択することができなかった。オロモ派もソマリ派も都合のよい歴史的記憶だけを喚起してみせた。ソマリ派は，かつてソマリもガブラを攻撃したことには言及しなかったし，オロモ派も軍事政権時代，ガブラが「ソマリの兄弟」を名乗っていたことなどには言及しなかった。歴史的記憶も，文化や宗教，言語と同様に，民族アイデンティティを選択する決定打とはならなかったのである。

6　想起の力

とはいえ歴史的記憶の想起は，文化や宗教，言語と異なり，この問題を解決する力を備えていると私は考えている。なぜならば，ガブラは歴史的記憶が，文化や宗教，言語以上に本質的な説明を与えてくれると考えているからである。彼らは，文化や宗教，言語が変化しうるものだと考えている。例えばガブラはオロモ語を話しているが，古歌にはソマリ語で歌われるものもあり，かつて自分たちがオロモ語を話していたとは限らないと考えている。またガブラがイスラム教に傾倒したのは，この40年ほどのあいだであると知っている。ガブラは，歴史的記憶をたどることによってのみ，かつての「本当」の自分たちを知ることができると考えているのである。

ところが第5節でみたように，実際には，歴史的記憶は現在の思惑に合わせて想起される。会議を主催したガブラの伝統的役職者は，会議が不調に終わると，会議をリードした12人からなる委員会（コミッティ）をつくることを提案した。そしてこの問題を，オロミア州に新設されるボラナ県の行政職の問題とともに，委員会で検討させることにした。民族アイデンティティの選択は，政治的利益と密接に関係している。委員会にはオロモ派とソマリ派の両方が含まれているが，利益を確保できるか否かで，どちらの民族を選択するかが決まるであろう。いずれが選択されるにせよ，委員会はその選択に相応しい歴史的記憶を自在に喚起し，その決定を人々に納得させようとするに違いない。想起の力は，人々に確かな過去との連続性と，新しい民族意識を構築するための足場をつくりだしていくのである。

（そが・とおる／弘前大学人文学部助教授）